

チンパンジー「アイ」の研究者

松沢哲郎 教授 インタビュー

ACADE見IC

研究の内容

霊長類学というと、サルだけを研究する学問というイメージがあるかもしれない。しかし実際には人間の本性に迫る「人間学」である。

今回はチンパンジー「アイ」の研究を通じて、人間の心の研究をされている松沢先生に研究の内容やアイとのエピソードなどを伺った。

(くじら)

僕が所長をしている霊長類研究所では、霊長類の心と体と暮らしとゲノムを研究しています。これらは霊長類を丸ごと理解するのに不可欠なものです。霊長類学はサルだけを研究する学問だと認識している人もいますが、そうではなく人間がどう進化してきたかを研究する学問です。人間の心も体も暮らしもゲノムもみんな進化の産物ですが、そのうち化石として

残るのは体に関するものに限定されてしまいます。となると、今生きている生き物との比較研究が重要です。だから人間と350種類以上もいるといわれる人間以外の霊長類の研究をしています。

僕は人間の心に興味があり、人間にとってもっとも近縁で、進化の隣人といえるチンパンジーの心の世界を研究しています。たとえば色の知覚や視力、記憶の研究です。そこで得られた成果を持ってアフリカへ行き、野生のチンパンジーでも実験しています。

僕が初めて野生のチンパンジーを見にアフリカへ行ったのは1986年のことです。そのときすばらしい毛並みのチンパンジーが、朝日を浴びながら僕の頭の上を枝から枝へ悠然と通過していく姿に感動しました。それからは毎年12月から1月にアフリカへ行くようにしています。

野生のチンパンジーを見て気がついたのは、親子関係の大切さです。だからアイだけではなく、アイと仲間や子どもとの関係も研究しなければならぬと思いつきました。それを日本に帰って実践し、ようやくそれらしいチンパンジーのコミュニティができてきたと思います。

(葉・3 こねこねこ)

アイとのエピソード

やはり一番記憶に残っているのは最初の出会いです。それは1977年11月のことで、僕は当時27歳になったばかりの若い助手でした。僕がアイの部屋に入ると、アイがこっちを向いて目と目が合いました。そしてアイは僕の目をじーっと見つめてきたのです。これにはとても驚きました。なぜならネズミやニホンザルの研究ではこんな経験をしたことがなかったからです。ネズミの目を見てもネズミが見返してくることはない。ニホンザルの目を見たら、ニホンザルは怒るか逃げるだけです。でもアイは違いました。

アイにあげるお土産がなかったため、白衣の袖を止めている腕抜きを渡しました。するとアイはそれを静かに受け取って自分の腕にはめました。そしてしばらくすると、こちらに返してくれたのです。これもネズミやニホンザルではありえないことです。

チンパンジーとは見つめ合うコミュニケーションや物のやり取りが成り立つ、このことにとっても驚きました。

学部生向けの講義

ポケゼミの「チンパンジー学集中実習」は少数の学生を一週間霊長類研究所に招いて行っています。その内容は、朝から

晩まで僕といっしょにいるというものです。その中で、研究や研究に必要な裏方の仕事を体験してもらいます。たとえば、チンパンジーを呼んで認知実験をするところを見たり、ごほうびのリンゴを8ミリ角に切ったりする。このように実際に経験することで、チンパンジーの研究や研究者の日常がどのようなものなのかを体験してもらいます。

ほかにも霊長類研究所では「霊長類学のすすめ」と「霊長類学の現在」を全学共通科目として提供しています。「霊長類学のすすめ」は心と体と暮らしとゲノムの分野の先生に1人ずつ出してもらって、京大でリレー形式の講義をしています。「霊長類学の現在」は「霊長類学のすすめ」だけでは満足できないという学生のために開講されました。期間は少し短いです。僕がポケゼミにならって犬山で実習に近い形の講義を行っています。

教授の学生時代

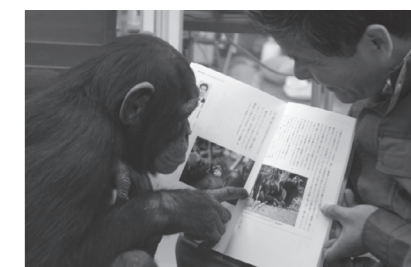
高校は東京都の都立校です。実家から一番近い大学だったので、東大に進学して学問がしたいと思いました。日本がそれほど豊かでなかった当時、公立の小中学校を経て地元の国立大学へ行くことが手っ取り早い親孝行だったからです。当時の国立大学の授業料は月額1,000円で、格安でした。ところが全国に飛び火した



▲アフリカに暮らすチンパンジー。2つの石をハンマーと台座として使い、硬い木の実を割っている

はみだし すてーじ

彼氏家のこたつに入りびたる日々……。⇒こんな自慢話を書いてください。



▲教授とアコム。アコムはアイの息子である

学生紛争の影響で東大入試がなくなってしまったのです。仕方がないので京大入試を受け大学進学を決めたわけですが、京大はバリエードで封鎖されていて講義はありませんでした。

そこで山岳部に入り、1年のうち120日間山に登る生活を送ることになります。2回生になって講義が再開されたもの、すでに山に登ることの方が大切になっていました。いわゆる「学部は山岳部」という生活です。だからどうしても出られない講義があったので、その分出られる貴重な講義は熱心に聴いていました。

今の学生に望むこと

「さ」「し」「す」が大切だと思います。一番ベースになるのは健やかな「す」。健やかな体を持って健やかな心を持つという意味です。次に大切なのはしなやかな「し」。柔軟性を持つという意味です。さらに望むなら、爽やかな「さ」。スカッと爽やかという意味です。

もちろんそれ以上のことも目指してほしいと思います。世の中の役に立ち、他人のために働ける人間になってほしい。しかしそのためには、自分自身がしっかりした、頼りにされる人間になる必要があります。だから、まず健康でないといけません。でもそれはベースであって、それだけで良いわけではない。他人の話に耳を傾けて、自分の方向を変えられる柔軟性も必要です。さらに、周囲をスカッとさせる爽やかさがあるとすばらしいです。この「さ」「し」「す」を兼ね備えた若者になってください。

——ありがとうございました。

(法・4 へもん)
(絶対に載せてやるものか;編)

プロフィール



1974年、京都大学文学部哲学科卒業。1976年、京都大学霊長類研究所に採用。チンパンジーの知性の研究と同時に、チンパンジーにおける知識や技術の世代間伝播を研究。2006年、霊長類研究所所長に就任し、現在に至る。

中国チベットのシシャパンマ峰(8,027m)の登頂者。

学生に勧める3冊は中島敦作品集、オマル・ハイヤーム『ルバイヤート』、サン＝テグジュペリ『人間の土地』。

はみだし すてーじ

はみだしすてーじには何を書いたらいいんでちゅか? ⇒答えは右に